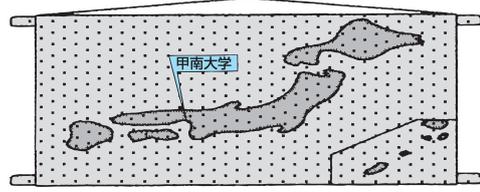


Zephyr

〈第85号〉

ゼフィール・にしかぜ



<https://www.konan-u.ac.jp/kilc>

《特集＊各国の大学入試について》

★所長からのメッセージ：古代の大学	佐藤 泰弘	2
〔フランス語〕 フランスの新バカロレア試験	中村 典子	3
〔中国語〕 中国の大学入試について	胡 金定	4
〔韓国語〕 韓国社会と大学入試	金 泰虎	5
〔日本語〕 外国人が日本の大学に入学するための試験について	谷守 正寛	6
おすすめの本		7
世界の有名な研究所（4）	金 泰虎	8

甲南学園創設者

平生鈞三郎

「世界に通用する

紳士・淑女たれ」



「英語＋1（第2外国語）」
教育プログラム

「使える外国語教育」

国際言語文化センター機関紙（年3回刊行）

大学入試という人生の一通過点

本号のテーマは「各国の大学入試について」ですが、あくまで各国の大学入試について詳細に解説するというよりも概要を述べて大まかに紹介するのが目的です。日本語教育を担当する私の立場から申しますと、日本の大学全体の入試について述べるのは門外漢なので控えるとして、留学生のための入試について少しく述べることに留めますが、各国の大学入試についても知ってもらうことは、これも国際理解の話のネタになるでしょう。

大学入試は受験する者にとっては人生の大きな転機となるものでしょう。筆者自身もそのために十代後半の大半を費やしたように思います。そして数時間の試験で、しかもひょっとしたら僅か数点の差で人生の方向が大きく舵を取られると言っても過言ではないでしょう。その数点のために、出題された問題の数百倍もの範囲の勉強をしたことは、その後の人生でも役立っているにちがひありません。例えば、当時は受験のためだけに勉強した英語が今では論文を執筆してグローバルに発信する貴重な手段として大いに役立っています。

もちろん大学入学がすべてではありませんが、本誌では、各国の学生たちがどのように勉強をして、それぞれの人生の難関の一つであるかもしれない大学入試を経ているのかについて、思いを巡らせてみましょう。

（谷守 正寛）



古代の大学

全学教育推進機構長・国際言語文化センター所長 佐藤 泰弘

大学に入学して色々な本に出会ったなかで印象に残っている一冊が、天野郁夫『試験の社会史』（東京大学出版会、1983年）です。入学直後のように記憶していたのですが、書誌を確認すると2回生の時でした。大学入試などの試験が研究対象になることに驚きました。一般的な大学入試のように学科試験で人を選別する制度の起源は、精緻な官僚制の歴史とともに、中国にあるはずですが、それを述べるには私の知識はお粗末すぎます。ここでは名著として定評のある宮崎市定『科挙－中国の試験地獄－』（中公新書）を挙げるに止めておきます。

今回のゼフィールは大学入試というテーマです。日本の古代・中世史を学んでいる立場で何を書くことができるだろうかと考えていて桃裕行を思い出しました。3回生で国史（今でいう日本史）を専攻するようになって桃裕行『上代学制の研究』という本を知りました。官人制や紀伝道の研究をしていた一つ上の先輩から教えてもらったのだと思います。

古代の大学つまり律令制度における大学は、官吏を養成するための学校です。「大学生」には五位以上の貴族の子弟、および東漢（やまとのあや）氏・西文（かわちのふみ）氏のような文筆で朝廷に仕える帰化人の子孫を受け入れました。六位以下の子弟も願い出れば入学できたのですが、有位者の子弟に限られていたのです。身分と世襲で大学生になれるのは、現代的な価値観からすると噴飯物のように思うかもしれませんが、初等教育が存在しない時代においては合理性があります。貴族の子弟や文筆を業とする帰化系氏族であれば、幼い頃から読み書きを教わっているからです（当然、読み書きが苦手な貴族もいました）。大学生になるには、年齢が13歳以上、16歳以下で、そして「聡令」であることが条件でした。身分と世襲だけではなかったものの、大学入試はなかったのです。

大学では儒学の経典を学びますが、『論語』『孝経』が必修で、『周易』『尚書』『周礼』なども学びました。これら経典には種々の注釈書があり、その中から、例えば『論語』は鄭玄・何晏注のように、指定された注釈書を学んだのです。そして古代の大学にも定期試験がありました。旬試という10日ごとの試験と、年終試という年度末（7月）の試験です。

大学には卒業試験もあり、それに合格して、ようやく官吏となるための国家試験を受けることができます。国家試験は、課題に対する文章を回答する秀才、儒学の経典を試験する明経、治国の課題に対する回答を作文する進士、律令を試験する明法という4種類です。この成績によって位階を授けられ、その位階に相当する官職に就きました。大学には無試験で入ったとしても、官吏になるには、かなり勉強しなければならなかったことが分かります。

ところが、律令制には蔭位の制という貴族の特権があり、五位以上の官人の子弟は、21歳以上で一定の位階を与えられて出仕することができたのです。そうすると、大学が敬遠されるのは目に見えています。奈良時代に活躍した藤原武智麻呂という貴族は、大宝4年（704）に大学の不振を歎いています。その後、慶雲2年（705）に蔭位の制による任官ではなく、大学を経ての任官が主たる方法の一つに位置付けられるようになりました。

今私の手許には『上代学制の研究〔修訂版〕 桃裕行著作集1』（思文閣出版、1994年）があります。本当に久しぶりにこの本を開いて、日本思想体系『律令』と新日本古典文学大系『続日本紀』も参照しながら、この原稿を書いています。古記録や暦の研究で知られる桃裕行は昭和8年に東京帝国大学を卒業し、その卒業論文が「上代に於ける学制の研究」でした。それをもとにした研究成果が、太平洋戦争をはさみ、昭和21年に『上代学制の研究』として出版されました。桃に限らず、昭和初期の日本史研究におけるテーマの清新さと豊穣さは、どのように生み出され、戦争を挟んで続けられたのだろうか。学生時代の問いを思い出しました。

フランスの新バカロレア試験

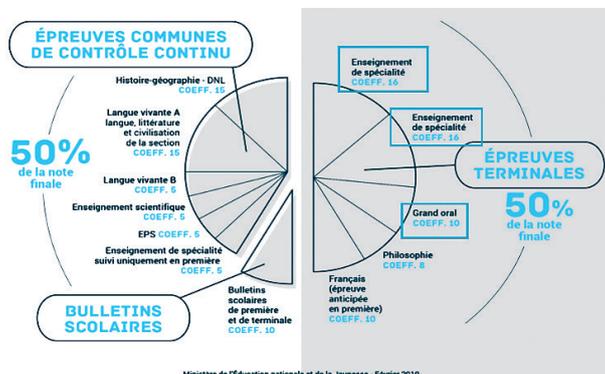
国際言語文化センター兼任研究員 中村 典子

フランスの**バカロレア baccalauréat** は、1808年に皇帝ナポレオン Napoléonにより創設された制度で、〈高校卒業資格〉と〈大学入学資格〉の2つの側面を持つ国家的な**全国統一試験**であり、略称で**バック bac**と呼ばれます。当初は口述試験のみで合格者は31名でした。1880年の時点でも、フランスの18歳人口の1%がbacを取得とあるので、狭き登竜門であったと言えます。その後、bac取得者の割合は飛躍的に伸び、2020年6月のバカロレアでは受験者の95.7%が合格しました。なお、2020年は、COVID-19の影響のため、初めてバカロレアの試験が実施されなかった異例の年でした。バカロレアが高校卒業資格だと考えれば、現在の高い合格率も頷けます。なお、2023年の合格率は90.9%でした。

1968年（5月革命の年）、バカロレアは3コースに分けられ、1993年以降は、**人文系（Lコース）、経済・社会系（ESコース）、理系（Sコース）**という名称で分類され、試験が実施されてきました。これら3つのコースを「**普通バカロレア bac général**」と呼び、そのほかに「**技術バカロレア bac technologique**」が創設され、その後、「**職業バカロレア bac professionnel**」も創設されましたが、一般の大学に進むには、「普通バカロレア」を取得します。

以後、改革案が議論されてきましたが、2019年度までは、高2にあたる第1学年で国語（フランス語）のバカロレア試験を受験し、高3にあたる最終学年で、6月中旬に6～8科目の試験（1科目あたり2～4時間の試験）を1週間にわたり毎日、受験することを余儀なくされていました。こうしたバカロレア試験が、6月の1週間に集中するという一方で、一発勝負になるという批判に加えて、合格後の進路と直接関係のある科目の教育を重視をすべきだという意見が強くなり、2021年度から新しいバカロレア試験が開始されました。実際に完全な形で新バカロレア試験が実施されたのは、2023年6月です。

新バカロレア試験において、すべての生徒が高2で受験する「フランス語」の試験、高3で受験する「哲学」の試験には、全く変更がなかったのですが、以下の円グラフからわかるように、試験科目数が5つに削減されました。（なお、バカロレアはすべて無料であるため、フランス政府は、経費削減のために科目数を少なくすることを以前から計画。）新バカロレアで課される新しい3つの科目は、以下の円グラフの中で で囲んである科目です。



〈図〉
フランス国民教育省のサイトより
〈<https://pedagogie.ac-toulouse.fr/hg-espagnol/les-coefficients-pour-le-bac-2021-en-section-binationale-bachibac>〉

2019年度までは、日本の大学入試と同様、ほぼバカロレアの点数だけで合格が決められていました。しかし、2021年以降、円グラフの左側の50%は、高3の段階までの学業成績で点数がつきます。円グラフの右側の50%のうち、高2で受験する「フランス語」と、高3の6月に受ける「哲学」の試験以外の科目は新科目で、「**専門教育科目1**」「**専門教育科目2**」と「**新口述試験 Grand oral**」の3つです。2つの専門教育科目は、自分が進みたい分野の科目2つで、高3の3月に受験。高3の6月に受験する「新口述試験 Grand oral」が新機軸の個別口頭試問（20分間）です。自分が進みたい2つの専門教育科目のうちの1科目についての問い（事前に提示されているため、高校教員の指導のもとで準備可）が課され、その場で20分の準備時間が与えられます。まず、試験官2人の前で自分のメモを参照しつつ口頭で5分間、問いに答え、進みたい進路などについて説明します。その後、試験官との質疑応答が10分間行われ、最後に5分間で総括します。バカロレアがもともと口述試験であったことを考えれば、納得がいきます。フランスでは、4時間の「哲学」の試験、3時間の「フランス語」の試験においても、論述するタイプの筆記試験が2世紀にわたって実施されてきており、**論述する力、書く力が求められています。**選択式の試験はほとんどありません。それに加えて、18歳の受験者全員に20分間にわたる口述試験を課すことは、フランスが口頭にて人を説得する力も重視する証左だと言えるかもしれません。新しいバカロレア試験の成果を追っていきたいと思います。

中国の大学入試について

国際言語文化センター兼任研究員 胡 金定

中国で「人生を左右する」現代版の「科挙（かきょ：kē jǔ）^{※注釈}」とも言われる中国大学入試は今年6月7、8日に行われました。今年の受験者数は昨年より98万人多い1291万人で過去最多となりました。国語、数学、外国語の試験が行われ、その他の科目は各省・自治区・直轄市の「高考」モデルに準じます。

中国の大学入試「普通高等学校招生全国统一考試」は日本の大学入学共通テストと同じく、一般的な大学入学者の選抜方法です。通称「高考（gāo kǎo）」といいます。

1949年、中国が成立して以降、中国人民政府は素早く大学入試制度の創設に着手しました。初期は大学独自または大行政区連合で行っていましたが、1952年には中国の全国大学統一入試制度が確立されました。1966年に発生した文化大革命で一時期中止されたものの、1977年に再開し、その後、中国の改革開放（1978年）政策の実施とともに高等教育が拡大され、大学入試制度の改革も継続しています。

近年の大学入学選抜方法にはAO入試「自主招生（zì zhǔ zhāo shēng）」、推薦「保送（bǎo sòng）」もありますが、ほぼすべての大学が全国統一大学入試「高考」を適用しており、独自の入試を行う大学は増えてきているものの1割に留まります。要するに、「高考」による“一発勝負”という課題があり、2014年9月には「國務院關於深化考試招生制度改革實施意見」が公布されます。全面的・総合的に大学入試制度の改革を実行することを示すものです。

具体的には「科目選択」「総合的な評価」を中心に改革が行われ、「英語のみ年に2回実施」という改革案を上海市や浙江省は2014年から試行的に取り入れました。その結果、高校における教育課程の形式に良い変化がもたらされました。中国各地は上海市や浙江省の経験を生かして、新しい「高考」の実施を広げていっています。

また、「3+3」と「3+1+2」の二つのモデルが導入されました。「3+3」モデルとは、受験生が、国語、数学、外国語の3科目の他に、思想政治、歴史、地理、物理、化学、生物の中から3科目を選ぶというものです。「3+1+2」モデルとは、受験生が、国語、数学、外国語の3科目の他に、物理と歴史の中から1科目を選び、思想政治、地理、化学、生物の中から2科目を選ぶというものです。

全国29の省・自治区・直轄市が新「高考」改革に着手しており、その第一陣として、浙江省、上海市、北京市、山東省など14の省と直轄市が今年、新「高考」モデルを採用しました。

中国の受験戦争の過酷さは日本の比ではありません。中国の人口は日本の人口1億2330万人の約11倍の14億2570万人で、「高考」には日本の大学入学共通テストの20倍以上の約1291万人の受験生が参加します。政府が重点的に資金を投入する「重点大学」と呼ばれる一流校はわずかに88校しかなく、入試倍率は20倍を超えています。

しかしいくら狭き門であろうと、いまだに都市部と農村部での格差が大きい中国において、唯一の「平等」とも言えるのが、「高考」です。このチャンスをもものにすれば、卒業後の活躍次第では豊かな生活が手に入ることになります。そう信じて家族の命運を担い、試験に臨む高校生たちは、学校に寝泊まりし、一日16時間以上勉強を続けて「高考」に臨みます。

初日、町の人々は沿道に詰め掛け、チアガールやブラスバンドが受験生たちにエールを送り続けるお祭り騒ぎになります。合格を祈る保護者たちは赤いチャイナドレス姿で子どもたちを待っています。チャイナドレスの漢字表記には「旗袍（qí páo）」という「旗」が入っていて、「旗を揚げて勝利する」という意味を込めた験担ぎだといいます。警察も受験勉強の邪魔にならないように、カラオケ店やスナックに対し、音を出さないよう取り締まりを行っています。改革を経ても尚、“一発勝負”の根本的な解決にはなっていませんが、今も昔も国を挙げての一大行事であります。

※注釈＝「科挙」とは、中国で598年～1905年の1307年間で行われた高級国家公務員資格の認定試験制度です。同制度は日本、朝鮮、ベトナムにも普及しました。科挙の競争率は非常に高く、最難関の試験であった進士科の場合、最盛期には約3000倍に達することもあったようです。

韓国社会と大学入試

国際言語文化センター兼任研究員 金 泰虎

韓国では、社会の底辺に「文治主義」という思想が根強く存在しています。文治主義は、宋（960～1127）時代に官僚制を整備し、科挙によって任用された文官が重用され、政治を行ったことから始まったと言えます。文治主義の根幹をなしているものは科挙という選抜試験であり、この試験を通じて職を得て出世をするという構図です。前近代の韓国社会における科挙は、高麗時代（918～1392）の光宗9（958）年から実施されています。しかし、この文治主義の矛盾は早くも元宗11（1170）年、文臣を優遇した結果、冷遇された武臣が起こした「武臣の乱」として現れました。

韓国社会の文治主義思想と大学入試には、どのような関係があるのでしょうか。一見、両者は何の関係もないように見えます。しかし、大学入試は文治主義思想を成し遂げる入口の選抜試験であるという意識が強いのです。名門校を卒業すると、一般的に個人が描いている文治主義思想が達成しやすいと考えているからです。そのため名門校を目指す大学入試の熱気はヒートアップしています。

韓国では、社会をあげて大学入試をサポートする様子からも文治主義思想がいかに根深いものなのかがわかります。例えば、親が入試を控える子供に縁起担ぎの食物を食べさせたり、入試日に通勤する人々の出勤時刻を遅らせたり、英語の聞き取り時間帯には軍の訓練を中止させたり、遅刻しそうな受験生を試験会場までパトロールカーで送ったりすることは文治主義社会の証左であると言えます。

しかし、韓国は学閥社会でもあるため、文治主義思想は大学入試のみに留まらず、出身校は就職後の出世にも強い影響を与えています。韓国社会における大学受験生が主に目指す大学は「SKY」と呼ばれる大学ですが、このSKYとは大学の英語の頭文字からとっています。つまり、ソウル大学（Seoul University：東京大学に匹敵）、高麗大学（Korea University：早稲田大学に匹敵）、延世大学（Yonsei University：慶応義塾大学に匹敵）を意味します。親が子供をSKY大学に入学させるため、どのようなことをしているのか、それは「SKY キャッスル」という題名の韓国ドラマの中で誇張されてはいるが、このドラマは日本にも紹介されています。なお、韓国社会の大学入試はSKY大学だけの問題に終わらず、ソウルに所在する大学にまで及んでいます。ソウル所在の大学は就職に有利であるということで、地方大学は定員割れをしている中、その倍率が非常に高いという現状があります。

このような現象は決して望ましいことではありませんが、現象だけで終わるときほど大きな問題にはならないと思います。しかし、大学入試の厳しい競争はプライベートレッスンに繋がっており、その費用が社会問題になっています。18歳人口が減りつつ、地方の大学が倒産する中でもプライベートレッスンにかかる費用は増え続けています。2022年度のプライベートレッスンにかかった費用の試算として26兆ウォンにもものぼるとマスコミは報じています。韓国社会の親たちにとって正課外のプライベートレッスンにかかる費用が大きな負担になっていることは、すでに1970年代から社会問題になってきています。韓国の歴代政権は様々な解決策を打ち出してはいたものの、効果がなく失敗続きに終わっていると言えます。

そこで、大学入試に対する改善策として1996年から始まった入試制度改革は問題点を抱えながらも未だに実施されています。この改善策には従来、一発勝負とも言える大学入試共通テストの「大学修学能力試験」の「定時」に加え、「随時」という選抜を取り入れています。随時の募集をすることによって大学入試の熱気が多少は和らいでいるように見えます。しかし、毎年プライベートレッスンにかかる費用が増えている統計数字から鑑みると、改善につながっているとは言えません。2022年の統計によると、今や随時で選抜する大学入試は全国平均で78%ですが、定時に繋がる大学修学能力試験の受験率も約89%にのぼっています。

一方、随時における不条理や不正が発覚し、大きな社会問題になっています。随時選抜には、教科科目の成績だけではなく学生の社会活動、つまり団体や学会での奉仕活動や論文などに名前を掲載する評価項目があり、この社会活動が評価に有利に働き、名門大学の入学に繋がります。数年前、大学教授兼政府高官だった人の子女は、本人が実際に行っていない奉仕活動の証明書を発行してもらい、また高校生にも関わらず学術論文の共同著者として自分の名前を掲載するなどして入学を果たした不正が発覚しました。

このような虚偽の奉仕活動や論文に不正に名前を載せることは、一般の人々の子女では考えにくく、政府高官や大学教員などの子女がほとんどです。2023年から発足した現政権は、大学入試の問題点を解決する一環として、まず大学入学共通試験は高等学校の3年間で学習した内容から出題するという方針を打ち出しています。しかし、韓国社会の文治主義思想が緩和しない限り、大学入試における問題点の解決は遠い道のりになると思います。

外国人が日本の大学に入学するための試験について

国際言語文化センター兼任研究員 谷守 正寛

本誌のテーマ「各国の大学入試について」に沿って、日本語教育を受け持つ私の立場から、入試の専門家ではないものの外国人の学部特別入試について簡単にふれたいと思います。外国人留学生が日本の大学に入るためにはどのような勉強が必要かというのは、直接関わっていない方にはあまり知られることはないでしょう。おそらく、しっかりと日本語の勉強をして、高い日本語能力が証明された学生が入学するのだらうと思われていると想像します。特に、甲南大学では最近になってようやく外国人の学部留学生の入試が始まったので、学内の教職員にとってもほとんど知られていないという実態があります。そこで、彼らがどのような勉強をして入学して来ているのかを少しご説明します。

日本の大学に入学する外国人留学生にとって、一番の問題は日本語であることは間違いないのですが、大学に入学した以上それだけで大学を無事卒業するのは無理だと、少し考えれば気づくはずですが。実は、日本で大学等に入学したい外国人留学生に対して、必要とされる日本語力や基礎学力を評価するために日本国内外で実施される試験として、日本留学試験（EJU）というものがあります。出題科目には、日本語以外に、理科（物理・化学・生物）、総合科目、数学があり、大学が指定する科目を選んで受験します。英語の試験はないのですが、大学では英語も必須なので、多くの大学では TOEIC のような検定試験の成績を提出させるところも多く、甲南大学でも幾つかの検定試験のうち一つの成績を出願書類に加えています。外国人を受け入れるのが学力面で不安に思う大学は、わざわざ手間をかけて大学の個別試験を作成して試験を行ってききましたが、「日本留学試験は、外国人留学生として、日本の大学（学部）等に入学を希望する者について、日本の大学等で必要とする日本語力及び基礎学力の評価を行うことを目的に実施する試験」（文部科学省）とされるように、最近ではこの日本留学試験の成績のみで（あるいは英語の検定試験の成績も加味して）可否を判定する大学もずいぶんと増えています。出題範囲も日本の高校の学習指導要領並みに定められているのですが、紙幅の関係で、ここで説明するよりも、百聞は一見しかず、ぱっと見て分かるような日本語以外の実際の問題のほんの一部を紹介し、日本の大学入試と遜色のないレベルであることをお見せしましょう（独立行政法人日本学生支援機構より掲載許可取得済み）。

問1 $a = \sqrt{5} + \sqrt{3}$, $b = \sqrt{5} - \sqrt{3}$ とする。不等式 $2|x - \frac{a}{b}| + x < 10$ を満たす整数 x を求めよう。

(1) $\frac{a}{b} = \frac{\mathbf{A}}{\mathbf{B}} + \sqrt{\frac{\mathbf{BC}}{\mathbf{D}}}$ である。したがって、 $\frac{a}{b}$ より小さい整数の中で、最大のものは \mathbf{D} である。

(2) 次の文中の \mathbf{F} , \mathbf{H} には、下の選択肢 ①～⑦の中から適するものを選び、 \mathbf{E} , \mathbf{G} には、適する数を入れなさい。

x が整数のとき、不等式の左辺は、絶対値の記号を用いずに次のように表される。

$$\begin{cases} x \leq \mathbf{E} \text{ ならば、} 2|x - \frac{a}{b}| + x = \mathbf{F} \\ x \geq \mathbf{G} \text{ ならば、} 2|x - \frac{a}{b}| + x = \mathbf{H} \end{cases}$$

① $x - 6 - 2\sqrt{10}$ ② $x + 8 + 2\sqrt{15}$ ③ $-x + 8 + 2\sqrt{15}$ ④ $-x + 6 + 2\sqrt{10}$
 ⑤ $3x - 6 - 2\sqrt{10}$ ⑥ $3x - 8 - 2\sqrt{15}$ ⑦ $-3x + 8 + 2\sqrt{15}$ ⑧ $-3x + 6 + 2\sqrt{10}$

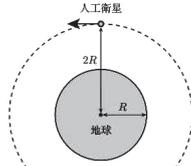
(3) 不等式 $2|x - \frac{a}{b}| + x < 10$ を満たす整数 x は、 \mathbf{I} 以上 \mathbf{J} 以下の整数である。

左は平成31年度第一回の数学の問題の一部

右は同じく物理の問題の一部

〔出典：独立行政法人学生支援機構（JASSO）ホームページ〕

F 地球を半径 R の球とし、地表での重力加速度の大きさを g とする。次の図のように、地球を中心として半径 $2R$ の等速円運動をする人工衛星がある。



問6 この人工衛星の等速円運動の周期はどのように表されるか。正しいものを、次の①～⑥の中から一つ選びなさい。

① $\pi\sqrt{\frac{R}{g}}$ ② $\pi\sqrt{\frac{2R}{g}}$ ③ $2\pi\sqrt{\frac{R}{g}}$
 ④ $2\pi\sqrt{\frac{2R}{g}}$ ⑤ $4\pi\sqrt{\frac{R}{g}}$ ⑥ $4\pi\sqrt{\frac{2R}{g}}$

筆者も数学や物理は得意だったのですが、久々に見たところちょっと頭を抱えそうな問題だと分かります。総合科目では社会科問題も課されますし、日本語の問題には記述式もあり、わざわざ小論文を課さなくてもその試験で作文能力も分かります。最近では面接も課さずに書類審査のみで合格させる大学も出てきていますが、こうした試験で高得点が取れる学生は非常に優秀なので、むしろ積極的かつ迅速に獲得していくのもよいかもしれません。



Thomas Piketty, *Le capital au XXI^e siècle*, (Seuil 2013)

フランス語版で970頁（日本語版では約700頁）に及ぶ浩瀚な書物『21世紀の資本』を2013年に出版したトマ・ピケティ（1971生まれ）は、フランス気鋭の経済学者です。現在、フランスの社会科学高等研究院（École des hautes études en sciences sociales）に所属し、自らが設立にかかわったパリ経済学校（École d'économie de Paris）の教授でもあります。世界の20カ国以上に関して、記録として残されていた、各国の富裕層の納税記録等の膨大なデータを遡って、およそ300年間分を調査し、詳細に分析した本書は、学術書であるにもかかわらず、世界中で異例のベストセラーとなりました。

格差拡大の根本原因であり、資本主義の中心的な矛盾としてピケティが描いた**不等式 $r > g$** 【 r ：資本収益率、 g ：経済成長率】（原著 p.55、邦訳 p.28 参照）が表しているのは、資本の蓄積が進んだ社会では、経済成長率（≒労働者の賃金の上昇率）よりも、資本収益率が大きくなり、富裕層が何世代にもわたって資本を蓄積していくことで不当な格差が拡大していく、ということです。これは、クズネッツ Kuznets のトリクルダウン理論の否定です（原著 p.30、邦訳 p.12-13）。つまり、富が富を生み、いくら働いても豊かになれない人々の層が存在する一方で、上位1%ほどの富裕層はますます豊かになるのです。しかも、グローバル化により、賃金が安い新興国に製造業を移転する傾向は、結果的に所得格差を世界中で肥大化させると警告しています。**ピケティが提示している解決策は、資本への累進課税です**。「むずかしいのはこの解決策、つまり累進資本税が、高度な国際協力と地域的な政治統合を必要とすることだ。」（原著 p.944、邦訳 p.603）日本についての記述もあり、興味深いです。ピケティ自身の原作・監修で、自らも出演している映画『21世紀の資本』（2019年）は、ピケティの視点から経済史を振り返り、著名な経済学者も数人、語り手として登場するので、映像を好む方にはこちらもお勧めです。（中村典子）

三 体 (劉慈欣)

『三体』（さんたい）は中国で最も人気のあるSF小説です。著者の劉慈欣は1963年生まれ、中国華北地方の山西省出身で、発電所のエンジニアとして働くかたわら、SFの執筆を始めました。

代表作『三体』は、2006年から中国のSF雑誌『科幻世界』に連載開始して以来、人気が爆発。第二部『黒暗森林』が2008年5月、第三部『死神永生』が2010年11月に出版されると、中国国内の様々な文学作品賞を受賞しました。

中国語版『三体』三部作で2100万部以上を突破しました。中国のみならず世界的にも評価され、2014年には英訳版が刊行され、100万部以上の売上を記録しています。世界20か国以上の言語に翻訳され各国で出版され、全世界では800万部以上を売り上げています。日本でも翻訳し出版され、累計37万部を超えるベストセラーとなりました。翻訳SFの単行本では今世紀最大の売り上げです。オバマ元米大統領、フェイスブック CEO のマーク・ザッカーバーグ、ジェームズ・キャメロン監督、日本でも多くの著名人から絶賛の声が上がり、話題となりました。

翻訳書として、『三体』はファンタジー界のノーベル賞といわれる第73回ヒューゴー賞の最優秀長編小説賞に輝き、中国人初、アジア人初の快挙です。

2019年2月5日には、短編小説『流浪地球』（邦題：さまよえる地球）を原作とした映画が中国で公開され、興行収入が46億人民元を超える空前の大ヒットを記録します。

日本では2019年4月30日、Netflixにおいて『流転の地球』というタイトルで公開され、好評を博しています。

劉慈欣は現在、最も注目すべき中国人作家の一人といえます。

『三体』のあらすじ、物理学者の父を文化大革命で惨殺され、人類に絶望した中国人エリート科学者・葉文潔。失意の日々を過ごす彼女は、ある日、巨大パラボラアンテナを備える謎めいた軍事基地にスカウトされます。そこでは、人類の運命を左右するかもしれないプロジェクトが、極秘裏に進行していました……。葉文潔が味わった絶望こそが、この物語のすべての始まりだったのです。スケールが大きく、先が気になってページをめくる手が止まりません。（胡 金定）

韓国仁荷大学付属の多文化融合研究所

国際言語文化センター兼任研究員 金 泰虎

韓国では、グローバル化時代に抱える諸問題、とりわけ人々の移動によって生じる多文化との関わりについての学問的追究はもとより、その諸問題の解決策や提案など実践に繋がる取り組みをしている研究所が誕生しています。それは韓国の仁川広域市に所在する仁荷大学の「多文化融合研究所 (The Convergence Institute for Multicultural Studies)」です。2011年、多文化教育センターの開設を皮切りに、2015年から多文化融合研究所 (以下、研究所と称する) に名称を変え、現在に至っています。その歴史は浅いですが、時代の変化や状況をいち早く反映した研究所であり、また精力的な活動は目を見張るところです。

グローバル化時代に突入し、韓国社会が急激な変化を迎える中、研究所の設立は現在韓国社会が抱えている問題に対し、真正面から取り組もうとする姿勢の現れであると思います。韓国社会には外国からの移住者が急激に増えています。世界の人々が簡単に国境を越えて互いに交わるといふグローバル化時代の特徴から鑑みると、この現象は決して不思議ではありません。韓国人との結婚を機に韓国に住む外国人、難民認定を求める多くの人々、不法滞在者や出稼ぎ労働者、朝鮮民主主義人民共和国からの脱北者、サハリン同胞の国内移住など韓国社会はこれらの移住者に対する様々な対応に迫られています。

韓国法務部の統計資料によると、韓国に滞在する外国人滞在者は236万7千人 (2019年7月の時点)、結婚移住者は16万7,860人 (2020年4月の時点) ですが、総人口5000万人の韓国であることを考えると少ない数字ではありません。とりわけ、結婚移住者には女性の割合が多く、韓国ではこのような家庭を「多文化家庭」と呼んでいます。多文化家庭で生まれた子供は韓国文化や言語に慣れず、学校生活にも影響が及んでいると言われていました。

グローバル化時代の到来とともに、世界では異文化理解、他文化理解、多文化理解が叫ばれていますが、実際には移住者に対する自文化の理解を求める傾向が強いです。しかし、研究所は「定款」に「文化の相対性に基づき、多様性を模索する開放的な思考を養うとともに多文化教育の専門の人材を養成するための多様なプログラムを開発し、韓国社会の多文化家庭に対する教育支援事業を通じて社会統合に寄与することを目的とする」と記しています。つまり、文化とは相対性であるという認識のもと、多様性を認めつつ融合 (開放的) 姿勢や方針を示しています。要するに、移住者に対し一方的に韓国文化を押し付けるのではなく、移住者の文化 (異文化) を尊重しつつ、韓国文化と融合させることを目指しています。その意味で、多文化融合という新学問の開拓や研究、そして異文化に対する姿勢は高く評価できると思います。

研究所は大学付属研究機関ではありますが、独立性を維持しつつ、研究所の掲げる研究や教育はもとより、韓国社会の抱える移住者の問題について学問的追究に基づく解決策の提案、多文化家庭の学生を教える教員の育成及び奨学事業まで手がけています。

研究所の傘下には大学院、多文化教育学科、BK (Brain Korea) 事業団、人文融合治療センターという組織まで配置し、多文化分野の研究者育成、そして多文化融合を目指す実際のケアまで行っています。しかも活発に国際会議、国際学会、海外学者招聘ワークショップ、多文化社会と多宗教教育フォーラム、そして多文化人文学市民講座などを開催しています。

研究所の取り組んだ成果は、学術誌として発行する『文化交流と多文化教育』 (6回/年)、『Journal of Multiculture and Education』 (3回/年) に掲載し、叢書も刊行しています。とりわけ叢書の発刊は、現在17冊にも上っています。これらの成果は多文化教育の発展に寄与し、多文化政策に関連する知識と情報を提供するとともに多文化交流を促進することに繋がっています。言い換えれば、学術誌と叢書は研究所が取り組んでいることに対する検証を行う紙面であるとも言えます。

以上、研究所の取り組んでいる諸々のことを鑑みると、研究所は名実ともに韓国における多文化研究、多文化社会の統合、その実践を目指すメッカであると言えます。研究所のHPは <http://www.cims.kr> です。

